

第二章 神の問題—「5つの道」の意味

1. 「神学」の主題は神である

- 1) 「神は何であるか」の前に、「神は存在するのか」の探究
- 2) 人間理性の光の根源である神的知性によって直接に啓示(聖書)され信仰をもって肯定された神
- 3) 神的知性の光から確実性を得た神学はその確実性において諸々の思弁的(理論的)学を超越している
- 4) トマスは以上の前提の下に「神の存在」を論証している

2. トマスの神存在論証の根本的前提

- 1) 神が存在するということの認識は本性的にわれわれに植えつけられている
- 2) 人間は本性的に幸福を追求する存在であり
人間は自らが根源的にそこから出てきて究極的にそこへと行きつく存在としての神について自然本性的に認識を有している
そして、人間のうちにある最高善としての幸福を欲求している
- 4) 人間の根源的な問いかけ「私はどこからきて、どこへ行くのか」
この誰しもみずからの人間としての「生」の全体を成立させ、方向付け、突き動かしている「究極的関心*」(ultimate concern)が幸福の追求である

* パウル・ティリッヒ(1886~1965)
プロテスタント神学者・宗教哲学者

3. 4. 5. 「神の存在」論証

1) アンセルムス(1033~1109)のア・プリオリ証明 * 『プロスロギオン』

「それ以上大なるものが考えられないもの」が理解できればただちに神の存在を確実に論証できる

* 今道友信先生の『中世の哲学』岩波書店 PP362~364

稲垣先生の『トマス・アクィナス』講談社 PP297~301

2) トマスの事実から理性と経験によるア・ポステオリの神学存在論「五つの道」

明白な経験的事実の確認から出発して、万人が神と理解している「五つの道」を提示している。「万人が神と理解し、名付けている存在」

(1) 第一の道

運動変化の事実から出発し、あらゆる運動・変化の第一の原動者を推理する道

(2) 第二の道

あらゆる作用の作動原因の系列の第一の原因を推理する道

(3) 第三の道

この世のものがいずれも可能的で偶然的であることから、その根拠としての絶対的に必然的なものを探る道

(4) 第四の道

この世にある完全性(perfectio=現代風に言えば価値)の原因としての絶対的完全性、絶対的価値を探る道

(5) 第五の道

目的論的考察によってこの世に内在するあらゆる秩序の統括者としての最高目的に思い及ぶ道

3) 「五つの道」のトマスの意図

- (1) 「本性的に知ることを欲する人間の知的探求は、万人が神と呼ぶ存在に到達することを必然的に要求する」→このことの立証の試み
- (2) 人間の最終課題、根本問題→神についての知的探求に向かう
- (3) 知的探求のベクトル→(より本質に、より源流に)→自然本性的に最高善として追求する幸福とは神である
- (3) 知恵の学び(=神学)→人間の真の幸福は、神への道を歩み、到達をめざす究極の知的探求の旅

6. 7. 神についての認識は否定を通じてのみ可能

- 1) 神は何であらぬか、いかなる仕方においてあらぬか
- 2) 人間理性が必然的に肯定する神の属性→神の単純性、完全性、善性、無限性、万物の存在、不変性、永遠性、「一」なること
- 3) 神の「一性」(神のアイデンティティ)→単純性、無限な完全性、世界の一性
- 4) 人間の神認識の限界→「知られざるままの神に結ばれる」
- 5) 根源的(ラディカル)な否定神学の立場
(←稲垣先生の『トマス・アクィナス』講談社)

トマスの創造的思想(神中心主義)

自然と恩寵、理性と信仰、必然性と自由、経験と神的照明の問題は豊かな展開をはらむ内的緊張と対立の関係の知的探求。

しかし批判者たちは一方をとるよう迫った→スコラ学の衰退へ

6) アリストテレス、トマスの最高の幸福

→神の直視の観想(theoria, contemplation) →but 近現代は観想の喪失、忘却